

松下幸之助記念志財団 研究助成  
研究報告

(MS Word)

## 【氏名】

徐 璐

【所属】(助成決定時): 京都大学文学研究科

## 【研究題目】

「満洲における日系漢字新聞をめぐるメディア史研究-『盛京時報』を中心に-

## 【研究の目的】(400字程度)

『盛京時報』は近代の満洲という特殊な時空で生まれたメディアである。同紙は1906年に奉天で創刊された最初の漢字新聞であり、1945年の終戦まで日本の対中宣伝の一翼を担う一方、中国人に広く読まれた有力紙である。つまり、同紙は、満洲で最も古く且つ最も影響力のある新聞として、日露戦争以降の満洲を物語る重要な史料であると同時に、近代における日中交流史を考察するにも重要な意義を持つといっても過言ではない。

申請者は、これら断片的な史料を無限に集成し、日露戦争後の満洲で日本人が創刊した『盛京時報』という漢字紙をめぐるメディア史研究を考察することを試みる。それで、一つの代表紙の成長史という視点で中国における日系新聞及び日本人新聞人の作り出した歴史を語りなおし、新聞をめぐる日中間の交流・紛争の実態を構築することを目指している。こうした国を跨いで作られた近代新聞のメディア史に着目することで、異文化間の相互理解と国際協力の促進に一役買えると信じている。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は従来の視座を転換し、メディア史研究の原点に立ち戻り、代表紙である『盛京時報』を中心に、紙面を越えた新聞人・新聞社の営為、現地の中国官憲・中国人購読者の反応へと研究対象を広げることで、日系漢字紙が言論界や日中関係に与えた影響を総合的に検討する。

従来では、新聞紙本体を除くと、関連する資料(例えば、社史的なもの)が少ないために、これまでの先行研究には紙面分析に重点を置かざるを得なかったという側面があったが、本研究は史料収集の範囲をさらに拡大し、外務省の対外宣伝に関する記録と新聞調書、遼寧省檔案館にある「奉系軍閥檔案」関連史料群、盛京時報社の日本人新聞人が書き残した手記、随筆集、回想録、『盛京時報』をはじめとする各漢字新聞も視野に入れる。こうして、同時代の日本と中国の資料を幅広く収集することで、従来知られていない『盛京時報』の新聞史を語れるようになるであろう。

具体的に、第一部分では『盛京時報』の発行規模・販路・購読状況・読者層を実証的にたどる。それによって、有力日系漢字紙としての同紙影響力(対中宣伝)の射程を確認する。第二部分では発行中の紛争事件(購読拒否と購読禁止)に着目する(『盛京時報』をめぐる筆禍事件が多く、1925年の五三〇事件をめぐる他紙との論争で起きた購読拒否や1927年の張作霖批判で起きた購読禁止が代表的である)。かの代表的な筆禍事件の解明によって、日系漢字新聞の発展の頓挫、そして対中宣伝の限界を示す。第三部分では盛京時報社を立ち上げ、新聞発行・経営を支えてきた在華新聞人に着目する。彼らの社内職務、在華新聞人となった経緯、その後の生き様を追うことで日系漢字新聞の組織構造、新聞をめぐる人の動き、そして近代以来、在華新聞経営に従事する在華新聞人全体像の一端を浮かび上がらせる。

## 【結論・考察】(400字程度)

同紙は満洲最古の日系漢字新聞として創刊され、その後、満洲言論界の重鎮となった。漢字新聞として紙面内容(時事ニュースや娯楽的内容など)が他紙より充実していたうえ、対中宣伝の性格を帯びていたにもかかわらず、奉天官憲の機関紙の報道内容を相対化できる点で読者の需要があった。対中宣伝を意識した日本側の金銭的支援は、同社の経営に大きく作用したし、同社に勤めた東亜同文書院卒の在華新聞人たちは、同紙の発行と編集に大きく貢献したと思われる。

以上のように、『盛京時報』に関する新聞史全般を語ることで、従来外部からの視点で「沿革興亡」を概観した日系新聞のメディア史を、内部からの視点でより明確、そしてダイナミックに語りなおせ、さらに新聞を主な一次史料とする中国近代経済史、社会史そして日中交流史といった分野に広範なる研究基盤を提供することが可能となる。その上に、近代における日中文化交流の物質的成果であるに着目することで、激動な時代における日中交流・日中関係の変遷を辿り、現代日中文化交流のさらなる発展にもすこし示唆を与えられるのではと考えている。